鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第３号 2020

ロシアとアジア
—ユーラシア国家ロシアの実像—

中野　潤三

要旨

ロシアは地理的に見れば、ヨーロッパからアジアにまたがるユーラシア国家である。だが、その歴史を見れば、ロシアはアジア的な相貌を持つ特異な欧州国家である。シベリア・ロシア極東の開発が遅れているために、ロシアは地図上のユーラシア国家であっても、真のユーラシア国家とは言いがたい。西側の経済制裁を受けたロシアは、中国への接近をさらに強めたが、それは中国依存へと転化している。ロシアが、シベリア･ロシア極東を本格的に開発して真のユーラシア国家となるためには、ユーラシア・アイデンティティを唱えるような夢想的なユーラシア主義の実践ではなく、まず硬直した権威主義的体制を変革して国内外の投資を促進する必要がある。

キーワード

ロシア，アジア，ユーラシア，アイデンティティ，対外政策

はじめに

１９１７年の十月革命により誕生したボリシェヴィキ（共産党）政権の当初の支配地域は、ヨーロッパ・ロシアの中央部に限定されていた。共産党政権は内戦と外国干渉軍との戦いの過程で帝政ロシアの版図を回復し、独立したフィンランドとポーランド、バルト三国を除いた帝政時代の領域を継承するソビエト連邦を発足させた。ソ連は１９４０年にバルト三国を併合した後､第二次大戦後の国境線変更によって東部ポーランドをソ連領とし、国境線を西方に前進させた。東欧諸国がソ連の衛星国となったことを考え合わせると、ソ連国家の重心はさらに欧州方向へと移動したことになる。また、軍事的な安全保障を至上命題としたソ連は、東西両陣営の軍事ブロック（北大西洋条約機構とワルシャワ条約機構）が対峙する欧州＝大西洋方面に主たる関心を払い、アジア＝太平洋方面はソ連にとって基本的に第二正面としての意義しか持たなかった。

１９９１年１２月､ソビエト連邦が崩壊し､その１５の構成共和国は独立国家となった。ソ連はモスクワを中心とする事実上の単一国家であったと解釈するならば、ロシアはソ連の崩壊により約５３３万平方キロメートルの領土を失い、地球の陸地の６分の１を占める国から８分の１を占める国へと縮小したことになる。アジアの領域について言えば、ザカフカス三国と中央アジア五国の分離独立によりロシアはおよそ４１８万平方キロメートル

のアジア部の領土を失った計算になる。だが、ロシアが東欧への影響力を失ったこと、バルト三国とベラルーシ、ウクライナの独立によりロシアの国境線が東方へ１０００キロ後退したことを想起すると、ロシア国家の地理的重心は東方＝アジア方向へ移動したとも言えよう。また、旧ソ連諸国の分離独立によりバルト海と黒海で海への出口が制約されたために、ロシアに残された海への自由な開放口は極北と極東地域だけとなった。これらの変化に注目すれば、ロシアにとってのアジア、自国のシベリア・極東地域とアジア・太平洋諸国の地政学的重要性が増したことを指摘することができよう。

以下、本稿では、ロシアにとってのアジアを歴史的に考察し、今日のロシアが言うところの「ユーラシア国家ロシア」の実像を明らかにしたい。

１．ロシア史の中のアジア

（１）アジアへの進出

地図を広げれば一見してわかるように、ロシアはヨーロッパからアジアにまたがるユーラシア国家である。その国土のおよそ３分の１はヨーロッパにあり、およそ３分の２はアジアにある。だが、ロシア国家はその起源から広大なユーラシア大陸の北半を領有していたわけではない。帝政ロシアの著名な歴史家クリュチェフスキーは、その『ロシア史講話』の中で「ロシアの歴史は植民された国土の歴史である」(1) と述べている。

ロシア国家の起源は、９世紀末に成立した東スラヴの統一国家であるキエフ・ルーシにある。その最大版図は、おおよそ現在のウクライナ、ベラルーシ、モルドバとロシア欧州部の西半を合わせた地域であり、アジアをその中に含んでいなかった。その後長くロシアは、アジア系の遊牧民族に南方と東方への進出路を押さえられ、アジアへの領土拡大を果たせなかったが、１６世紀の終わりにはウラル山脈を越えてシベリアへの進出を始めた。ロシアはコサック (2) の遠征を通じたシベリア進出を続け、１６４８年にはコサックの一隊がベーリング海峡に到達した。コサックはそこから南下を始め、１６５３年までにアムール川流域を征服した。かくして、ウラルを超えた東方植民は約５０年でユーラシア大陸の東端に至り、広大なアジアの領域をロシアの版図に加えたのであった。

国力の充実期にあった清国と極東で対峙したロシアは、清国との間でネルチンスク条約（１６８９年）を結び、アムール川流域を放棄した。だが、１９世紀になるとロシアは、西欧列強の中国進出に対抗するため、清国の弱体に乗じてアムール川左岸とウスリー川東岸を清国に割譲させた（１８５８年愛琿条約、１８６０年北京条約)。さらにロシアは、ロシア極東地域から太平洋への進出を窺う拠点としてウラジオストック（ロシア語で「東方支配」を意味する）を建設し、同地に港を築いた。

日本との間では１８５５年に日露和親条約を締結し、千島列島のウルップ島以北をロシア領、択捉島と国後島を日本領とし、サハリンについては境界を定めないこととしたが、１８８５年のサンクト・ペテルブルグ条約（千島樺太交換条約）により、ロシアは千島列

島の領有権を日本に譲り、樺太（サハリン）の領有権を得た。

クリミア戦争と露土戦争[3]の敗北により西南方＝近東・バルカンへの進出を阻まれたロシアは、進出のベクトルを東方＝極東へ転じるとともに、南方＝ザカフカス（コーカサス)・中央アジアでも領土の拡大を図った。クリミア戦争の終了後、ロシア軍はザカフカスに侵攻し、１８６４年までにその全域を占領した。さらに翌年からロシア軍は中央アジアへ遠征し、１８８５年までにロシアの占領域はアフガニスタンとの国境線にまで達した。帝政ロシアは、アフガニスタンを挟んでインドを領有する大英帝国と対峙することとなった。このため、ロシアのさらなる南方進出はイギリスの圧力により阻止されることになったが、帝政ロシアはこの南方への領土拡大によって、さらに広大なアジアの領域をその帝国内に併呑したのであった。

（２）ロシアのアジア的相貌

ロシアは東方・南方への植民によってアジアへの領土拡大を果たしたわけであるが、そもそもロシアとアジアとの関わりは、このようなロシアの主体的な活動によって始まったのではなかった。キエフ・ルーシの時代以前からロシア人の始祖東スラヴ人は、ロシア平原南部の草原地帯でアジア系遊牧民族と接触し、彼らの侵入に悩まされていた。クリュチェフスキーは、「ヨーロッパ・ロシアは歴史的にはアジアではないが、地理的には完全なヨーロッパでもない」と言う。中央アジアの草原に接続するロシア平原南部の草原地帯を「ヨーロッパ大陸に打ち込まれたアジアのくさび」と形容して、「ヨーロッパ・ロシアの自然は絶えずロシアをアジアに引っ張り込み、またアジアをロシアに引っ張りこむ特性を持っている」とクリュチェフスキーは指摘している。この草原の道から「恐るべきアジアの客がロシアにやって来た」[4]。

１２２３年に初めてロシアに侵入したモンゴル人は、１２４３年にキプチャク汗（ハン）国を建国しロシアの諸侯を臣従させた。ロシアは以後２世紀半にわたって「タタールのくびき」[5]と呼ばれるモンゴル人の支配を受けることになった。この「タタールのくびき」は、ロシアをヨーロッパから切り離してロシアの相貌にアジア的色彩を与えた、と評価する歴史家も多い。こうした評価によれば、モンゴル人の都市破壊と過酷な収奪によってロシアの文化と経済・社会は停滞し、モンゴルの専制的支配が後にロシアを統一するモスクワ公国の専制的体質を強化して帝政ロシアの専制政治を生み出し、ロシアは政治・経済・文化のあらゆる面で西欧に後れを取ることになった。

だが、この時代にもイコン（聖像）芸術を中心とする教会美術の開花や、手工業と商業の発達による都市の再生が見られたことを考えると、モンゴル支配の時代を不毛の時代と断じることはできないし、帝政ロシアの専制の淵源を「タタールのくびき」のみに求めることもできない。その淵源は、キエフ・ルーシが東方教会のキリスト教（東ローマの正教）を受容したことに遡る[6]。すなわちロシアは、西欧の市民革命につながる宗教改革や啓

蒙思想を経験しなかったのである。モンゴル支配下のロシアがルネサンスというヨーロッパの転換期を西欧と共有せず、その影響をほとんど受けなかったため、ロシアが歩む歴史の道が西欧のそれから隔離し始めたことも否定できないだろう。Ｔ．Ｇ．マサリクは『ロシアとヨーロッパ』（１９１３年刊）の中で、「ロシアは、かつてのヨーロッパなのである、ロシアとヨーロッパを対比するならば、それは二つの時代を比較していることになる」(7)と、両者の隔離を表現している。

クリュチェフスキーによって地理的には完全なヨーロッパではないと定義されたロシア、正確にはヨーロッパ・ロシアは、歴史的にも完全なヨーロッパとは言い難いのである。このため、１８世紀初めのピョートル大帝の改革に始まる近代化＝西欧化の過程で、ロシア人は自らのアイデンティティの確立に悩み、西側世界に対する後進性の克服が―その時々の為政者の主張に関わらず―帝政ロシアからソ連を通じて現在のロシアに至るまで、ロシア史を通底する問題として提起されることになる。

（３）ロシアのアイデンティティ

帝政ロシアの西欧化は、専制の堅持を前提とした表層的な近代化であったが、その過程でインテリゲンツィアと呼ばれるロシアの知識人階級が誕生した。１９世紀の半ば、インテリゲンツィアの中でロシアの本質と歴史的使命をめぐる西欧派とスラヴ派の論争が始まった。西欧派はロシアの後進性を痛言し、個人の自由を基本原理とする西欧市民社会に範をとった改革の徹底を唱えた。これに対してスラヴ派は、西欧社会の個人主義と物質主義を厳しく批判し、正教を紐帯とする「ソボールノスチ」（霊的な全一的共同体）こそロシア精神の本質であり、社会の基本原理とすべきものである、と主張した。

このようなスラヴ派の主張から、正教を護持する聖なるロシアこそが無神論と唯物主義に毒されたヨーロッパを救うというメシアニズムが醸成され、さらには、西欧＝カトリック世界に対抗するためには、ロシアによるスラヴ＝正教世界の統一が必要であるとする汎スラヴ主義が誕生した。汎スラヴ主義は帝政政府の近東・バルカン進出政策と結びつき、ロシア国家主義・帝国主義の理論的支柱となった。だが、現実政治の場面でロシアの進出が西欧列強により阻止されると、汎スラヴ主義も衰退した。

前述のように、近東・バルカンへの進出を抑えられたロシアは、帝国主義的進出の矛先をカフカスと中央アジアを貫通して中東・南アジアへ、アムール川を超えて極東へと向けることになった。この新たな東方指向の過程で唱えられた理念が汎アジア主義であった。その最初の提唱者となったのは、汎スラヴ主義の熱狂的な主唱者でもあった作家ドストエフスキーである。ドストエフスキーは自らの政治・社会評論を収録した『作家の日記』最終号（１８８１年１月）の最終章で、中央アジアに侵攻するロシア軍の勝利を祝賀し、「アジアにおけるロシアの使命」と「ロシアの将来にとってのアジア」を論じている。彼は「われわれはなぜアジアを必要とするのか」と自問し、次のように答えている。

「ロシア人はヨーロッパ人であるだけでなく、アジア人でもある。われわれがアジアに方向転換すれば、アメリカを発見したヨーロッパに生じたような精神の高揚と力の回復が見られるに違いない。われわれはヨーロッパではタタール人だったが、アジアではヨーロッパ人である。アジアにおける文化普及者となることがわれわれの使命である。この使命がわれわれに品位と自覚を与えるであろう。このためには二本の鉄道を敷設すればよい。一本はシベリアへ、もう一本は中央アジアへ。アジアはロシアの救いであり、そこにわれわれの富と大洋がある。われわれはヨーロッパへの仲間入りを果たそうとしたが、その結果得たものは憎悪のみであった。なぜか。ヨーロッパはわれわれを仲間とは認めず、内心密かに軽蔑し、自分たちより一段低い種族と見なしているからである。彼らはロシアを自分の文化に何の縁もない僭称者と考えているのだ。だが、アジアはわが国の救いの道である。私はそれをもう一度絶叫する」(8)。

ところが､アジアをロシアの救いと高唱するドストエフスキーは同時に､「われわれはヨ―ロッパを見捨てることはできない」､「ヨーロッパはロシアと同様にわれわれの母親である」(9) と言う。アジアで再生したロシアは、自分たちを見下してきたヨーロッパと対等に向かい合うことができる。そうすれば、バルカン問題等もロシアの有利に一挙に解決できるのだ、とドストエフスキーは主張する。結局、ロシアが帰るべき場所はヨーロッパなのである。

スラヴ派から汎スラヴ主義、さらには汎アジア主義に至るまで、その主張の基底にある心情はヨーロッパに対する屈折した思いである。汎スラヴ・アジア主義の主張の中に強烈なロシア国粋主義を見て取ることは容易である。だが、国粋主義の心情を吐露したかに見えるドストエフスキーは､「真のロシア人になることは､ヨ―ロッパの矛盾に最後的な和解をもたらし、同胞的な愛をもって全ての民族をキリストの福音によって完全に結合させる偉大なる一般調和をもたらすことである」(10) と説いて、スラヴ派と西欧派の対立を止揚したとも評価されている。こうしたロシアの思潮を眺めると、ロシア人のアイデンティティがヨーロッパにあること、アジアと対面する時もその心性の中では常に西方を志向していることが理解できよう。これは､「西側は自分たちを拒んでいる」と言う現代のロシア人にも通じる心情である。

２．革命ロシアにとってのアジア

（１）革命論とアジア・第三世界

マルクス主義の古典的な革命論によれば、社会主義社会の建設は、資本主義の発展による豊かな生産力を基盤として初めて可能となる。こうした見地に立ってカール・マルクスは、西欧列強のアジアに対する植民地支配を肯定的に評価した。すなわち、マルクスによれば、列強の植民地支配の目的がいかに忌むべきものであろうとも、留意すべき事実は、ヨーロッパのブルジョアジーが停滞したアジア社会で近代的発展のための物的基盤を無

意識に創出していることなのである。だが、後にマルクスとその盟友エンゲルスは、資本主義の発展段階を経由しない社会主義への道＝非資本主義的発展の可能性を認めるようになった。彼らはロシアの農民共同体の共同所有制（１１）に注目して、ロシアには資本主義の発展段階を回避して社会主義へと向かう「歴史が一国民に提供した最良の機会」（１２）がある、と考えるようになった。さらにエンゲルスは、ロシア以外の後進国についても社会主義へ至る非資本主義的な発展の可能性を認めた。

マルクス・エンゲルスは後進国の非資本主義的発展の可能性を指摘するに留まり、そのための具体的な方途を提示しなかった。レーニンは、東方諸国（植民地・半植民地諸国）の民族解放運動をソビエト･ロシアの社会主義建設と先進資本主義諸国の革命運動と並ぶ世界革命の要因と位置づけた。しかしながら、レーニンもマルクス･エンゲルスと同様に、東方諸国が資本主義的発展段階を回避する具体的なプロセスと方途を明示しなかった。東方諸国に対するレーニンの最大の関心事は、「世界革命過程」を前進させるための民族解放運動の戦略・戦術の形成にあり、これら諸国の発展過程の予示ではなかった。レーニンの脳中では、革命ロシアの生き残りと世界革命の進展は密接不可分であったが、一国社会主義を標榜したスターリンは、レーニンのこうした問題意識をソ連の安全保障の問題に矮小化し、ソ連国家の生き残りのために東方諸国の民族解放運動を露骨に利用した。

第二次大戦の終了後、アジア・アフリカで反植民地主義・帝国主義を唱える独立国が陸続として誕生すると、ソ連は新興独立諸国の社会主義陣営への接近を期待するようになった。１９６０年代のソ連はこれらの国々を、民族の独立を守って民主主義革命の道を歩む「民族民主主義国」と定義し、その革命段階を社会主義の前段階と位置づけるようになった。ところが、民族民主主義国と定義された諸国の中には、共産党を非合法化し、弾圧する国も少なからずあった。このため、ソ連国内でも新興諸国の「社会主義への自動的移行」という楽観論が戒められるようになったが、１９７０年代になるとソ連の第三世界に対する楽観論が復活する。当時のソ連は、新たな親ソ政権（アンゴラ、エチオピア、アフガニスタン等）の誕生に力を得て、社会主義へ向かう発展路を選択した国々が着実に増加しているという認識を示していた。ソ連のイデオロ―グは、「科学的社会主義」（マルクス・レーニン主義）を受容した国々を特に「社会主義志向国」と呼び、第三世界の社会主義志向の増進を指摘して、国際場裏における東西両陣営の力関係の有利な変化を強調するまでにいたった。

（２）新思考とアジア・第三世界

ソ連軍のアフガニスタン侵攻（１９７９年１２月）を直接の契機として、世界はデタント（緊張緩和）の時代から新冷戦の時代へと変移する。その背景には、１９７０年代に顕著となったソ連の軍拡と第三世界への進出に対する米国の危機感があった。この米国側の危機感によるレーガン政権の対ソ強硬政策が、力関係の有利な変化というソ連の錯覚を消

し去り、ソ連は西側との全面戦争まで危惧するようになった。このような東西の厳しい緊張関係の中で、「新思考」を唱えるゴルバチョフが登場した。１９８５年３月、ソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフは、内政で「ペレストロイカ」（建て直し）を訴えるとともに、外交で「新思考」を唱えた。

新思考は現代の世界を「相互依存の全一的世界」と捉えて、核戦争の回避や環境問題の解決、南北問題の解消等の「全人類的利害」が階級的利害（東西対立の視点）に優先する、と説くものであった。ソ連にとっての新思考の実際的意味は、西側との緊張緩和による過大な軍備の削減と世界経済への参入によって、国内経済の再建を図るペレストロイカを支援することにあった。新思考によってソ連の第三世界政策も変化する。ソ連にとっての第三世界は、もはや世界革命の要因ではなく、経済利益を汲み出すべき場となった。

ゴルバチョフはソ連外交の第一義的任務を国内経済発展への貢献と規定し、対外経済政策の抜本的改革を唱えて、第三世界に対する経済支援の見直し、ソ連の世界経済への参入を政策指針とした。こうした政策転換は、自国経済の負担となると同時に西側との関係悪化の要因ともなっている社会主義志向国支援の放棄という形で現れた。これと並行してソ連は、経済発展の著しい第三世界の新興工業諸国（ＮＩＣＳ）、とりわけアジアのＮＩＣＳへの接近を図った。ソ連軍のアフガニスタン撤退（１９８９年）と韓国との国交樹立（１９９０年）が政策転換を象徴する外交行動であった。

１９８６年４月、ソ連はアジア・太平洋地域の協力拡大に関する「政府声明」を発表し、経済問題を含む安全保障問題の協議と「全アジア・フォーラム」の形成を提唱した[13]。声明は、資源に恵まれたシベリアとソ連極東が、ソ連の国際分業参加、地域諸国との通商・経済協力の基盤となることも力説していた。同年７月、ウラジオストックを訪問したゴルバチョフは、「太平洋の前哨」であるソ連極東を「高度に発展した経済地帯」に変えねばならない、と演説した[14]。さらにゴルバチョフは、全てのアジア・太平洋諸国との二国間関係の強化を図り、太平洋経済協力構想の協議にも加わる用意があると述べ、地域経済への参入に向けたソ連の積極的姿勢を示した。こうした声明や演説は、自国の極東地域とアジア・太平洋地域の重要性を軍事・安全保障の観点のみから捉えるのではなく、国内経済の再建という経済的な観点からも認識しようとするものであった、と言えよう。ゴルバチョフ期ソ連のこのようなアジア政策の問題意識と政策スタンスは、現在のロシア連邦のアジア政策にも継承されている。

（３）超大国の総決算

第二次大戦に勝利して東欧を共産化したソ連は、社会主義陣営の盟主となり、「発達した社会主義国」、「超大国」としてのプレゼンスを誇示するようになった。だが、超大国ソ連の真実の姿は「粘土の足を持った巨人」――弱体な経済基盤の上に立つ軍事大国であった。この事実を深刻に認識したゴルバチョフは改革に乗り出すが、社会主義体制下での抜本的

改革という矛盾を克服できず、１９９１年８月の保守派クーデターとその失敗によって、共産党の解散、ソ連邦の崩壊へと、事態はゴルバチョフの思惑を越えて急展開した。ペレストロイカと新思考外交は、第三世界の社会主義志向国を切り捨て、東欧諸国のソ連圏からの離脱を黙認して社会主義陣営を解体し、ついには結果としてソ連の崩壊を招いた。残されたものは、ロシア史を通底する「後進性の克服」という課題を依然として抱えているロシアそのものであった。「資本主義から社会主義への移行期にある歴史の発展過程」で最先頭を走っていたはずのソ連＝ロシアは、実際には先進資本主義国の後塵を拝する「一周後れのランナー」であった。

非資本主義的発展の可能性を認めたマルクス・エンゲルスにとっても、資本主義が創出する物的基盤を持たない後進国の革命政権が独力で社会主義社会を建設することは、絶対の不可能事であった。換言すれば、後進国の非資本主義的発展にとって不可欠の要因となるのは、革命ヨーロッパ（先進社会主義国）による支援という外部的な要因であった。革命ロシアも西欧革命の勃発に期待したが、ヨーロッパで革命運動が後退すると、スターリンの独裁下で一国社会主義の道を歩み始めた。ペレストロイカ時代のソ連のある第三世界研究者は、当時の社会主義志向諸国の政治的・経済的混乱を指して「歴史の復讐」である、と看破した。すなわち、「後進国で資本主義的発展を阻害することは、その国の進歩を阻害することを意味する」と。資本主義から社会主義への段階的発展論はさておき、ソ連崩壊後のロシアがこの「歴史の復讐」を受けていることは間違いなかろう。

ロシアの発展の拠り所となるのは、もはやイデオロギーの幻想ではない。それはロシアの地政学的定位にある。ソビエト連邦の国章は、農民階級と労働者階級の同盟国家を象徴する「鎌と槌」であった。ロシア連邦の国章は、帝政時代の国章を復活させた「双頭の鷲」であるが、帝政ロシアの国章の起源は、モスクワ大公国がビザンツ帝国の紋章であった「双頭の鷲」を継承したことにある。東西に顔を向けた双頭の鷲は、ローマ帝国の後継者としてのビザンツの正当性―西ローマではなく東ローマが、帝国の東半分と西半分をともに支配する正当性を象徴しようとするものであった。１９９２年１１月、韓国を訪問したエリツィン大統領は、「双頭の鷲の顔の一つは東方を向いている」(１５) と語り、アジア外交の活性化を宣言した。新生ロシアの国章が象徴するものは、ヨーロッパとアジアにまたがるユーラシア国家としてのロシアのプレゼンスであるとも言えよう。ソビエト・ロシアがイデオロギーを国家の成立基盤としていたとすれば、新生ロシアは地政学的定位をその成立基盤としたのである。

３．新生ロシアにとってのアジア

（1）大西洋主義外交からユーラシア主義外交へ

ロシア連邦の発足後間もない１９９２年２月、新生ロシアの外交路線を検討する会議がロシア外務省で開催された。会議に出席したコズィレフ外相（当時）は、次のように述べ

て、外交の基本路線を西側社会―西側の政治・経済・安保体制との一体化と定立した。

民主主義と市場経済を選択した新生ロシアは、西側諸国との同盟関係の構築によって「文明世界」に復帰しようとしている。このためのプロセスは段階的なものとなろうが、西側との友好・同盟関係の形成という政策路線はすでに選択済みである。問題はその実現方法である。我々は、米国の支援を受けて経済復興を成し遂げた第二次大戦の敗戦国―日独伊と同様な道を躊躇うことなく歩むことができよう（１６）。

このような主張を批判する発言を行ったのが、ロシア大統領顧問（当時）のスタンケヴィチであった。彼は西側社会との一体化を目指す外交路線を「大西洋主義」、ユーラシア国家であるロシアの歴史的・地政学的特異性を踏まえて東方外交を重視する外交路線を「ユーラシア主義」と呼んだうえで、コズィレフの西側偏重外交を次のように論難した。

旧ソ連邦諸国の独立によってロシアが欧州から切り離された現状を考えると、東方＝アジアに外交努力を傾注する必然性があろう。西側経済への無分別な融合は、ロシアを西側の「格下のパートナー」とすることに他ならない。西側との性急な一体化を追求するのではなく、国益と独自性を損なわずに世界経済へ参入しようとしている非西側諸国との関係を重視すべきである（１７）。

最高会議国際問題委員会の委員長であったルキン（後下院国際問題委員会委員長）も、この会議でアジア政策の重要性を強調する発言を行っている。彼はまず、新生ロシアが置かれている地政学的環境を熟視して新たな外交指針を定立すべきであると言い、次のように論じた。

ロシアは先進的なヨーロッパと後進的なアジアの中間に存在してきた。ところが、今やわれわれは、復活し統合へ向かうヨーロッパと、ダイナミックに発展するアジア・太平洋地域という二つの先進地域の間に存在している。この現実はわれわれに巨大な可能性を与えると同時に、ロシアが両地域の狭間で屏息する危険性も孕んでいる。われわれはヨーロッパとアジアの双方で発展する大きなチャンスを持っているが、この両方面と南方のイスラム圏で対処を誤れば、戦略的なカタストロフィーをロシアにもたらすであろう（１８）。

つまるところ、コズィレフと、スタンケヴィチ、ルキンの政策論の違いは新外交の基点設定に起因していた、と言えよう。すなわち、前者がソ連邦崩壊によるロシアの政治・社会体制の転換を新外交の基点と捉えて、西側指向外交を唯一の選択肢と考えたのに対して、後者はロシア国家の地政学的環境をその基点として、東西のバランス外交の必要性を強調したのである。

１９９２年１０月、エリツィンは外務省幹部を前にした演説で、「ロシアの対外政策は多角的でなければならないが、東方で外交を活発に展開する努力がなされてこなかった」（１９）と述べた。この時点でロシア指導部は、欧米先進諸国との関係構築に専念する姿勢から、アジア諸国との関係強化にも力点を置く多角的な対外政策へ移行する姿勢を明らかにしていた、と言えよう。実際の外交活動においても、１９９２年秋から１９９３年初め

にかけてのエリツィンのアジア諸国訪問（１９９２年１１月訪韓、１２月訪中、１９９３年１月訪印）によって、ロシアのアジア外交の始動を見て取ることができた。

（２）エリツィン政権のアジア太平洋外交

ロシアのアジア太平洋政策は、当該地域諸国との二国間関係の発展、地域の政治・経済プロセスへのロシアの参加、シベリア・ロシア極東の地域経済体制への組み込みの三つに集約される。ロシアの外交当局は、これらの政策を「ロシアの鷲に東を向かせるための三位一体の政策」(２０) と形容した。二国間関係の発展については、中国との「戦略的パートナーシップ」の構築等に見られるように、ロシア外交は一定の成果を挙げたと言える。

これに対して第二と第三の政策課題の遂行については次のように評価できた。

ロシアの外相はアジア太平洋地域の安全保障問題を協議するＡＳＥＡＮ地域フォーラムに毎年参加し、同地域の安保問題に積極的に関与して地域の安保体制の形成者の一員として地域諸国に認知されるように努めた。しかしながら、ロシアは１９９８年にＡＰＥＣ（アジア太平洋経済協力会議）に初参加したが、地域経済のフルメンバーとは見なされるのには遠かった。第二の政策課題と密接に関連している第三の課題については、シベリア・ロシア極東の開発の遅れが同地方のアジア太平洋地域経済への統合を阻害し、それによってロシアの地域経済プロセスへの参加も妨げられたというのが実情であった。

すなわち、ロシアのアジア・太平洋政策は、三位一体であるはずの三つの基本政策のうち、二国間関係の発展のみが先行するバランスを欠くものであった、と言えよう。また、二国間関係の発展の中でも対中関係に偏重し､エネルギー･兵器輸出による関係深化がその中で大きな比重を占めたという意味でも、ロシアのアジア太平洋政策には歪みがあった。このような歪みを是正する方策は、シベリア・ロシア極東のアジア太平洋地域経済への組み込みによってロシアが同地域社会のフルメンバーになることであり、その前提となるのが、シベリア・ロシア極東の開発促進である(２１)。

ロシアは冷戦後の世界を多極世界と認識し、多極的な国際体制の構築がロシアの対外政策の目標であるとしている。多極世界を強調するロシアの意図は、米国一極支配の牽制にある。だが、ロシアは世界大の視点で米国の一極支配に反対する一方で、アジアにおいては、米国のプレゼンスよりも中国の台頭を警戒していたように思われる。１９９６年から顕著となったロシアの対日接近は、台頭する中国への警戒心という政治的要因と、シベリア・ロシア極東開発への協力の取り付け、日本を通じた地域経済への融合（ロシアは日本の支持を受けて１９９８年秋にＡＰＥＣ加盟）という経済的要因から生まれたものであろう。しかしながら、ロシアの安全保障と経済利益の両面で中国が持っている重要性を想起するならば、ロシアの対日接近を中国重視外交から日本重視外交への転換と解釈することはできなかった。アジア･太平洋政策におけるエリツイン期ロシアの動きは、ロシア外交の指針―多極の一極としての全方位外交の展開という文脈で解釈すべきものであった。別言

すれば、中国偏重外交がロシアの中国依存へと転化する危険性にエリツィン政権が留意し、対日関係の重要性を再認識し始めていたということになろう[22]。

（３）プーチン政権の東方指向と中国依存

革命がロシアをヨーロッパの資本主義文明から切り離したことを踏まえて、ロシアはスラヴとアジアを融合したユーラシア国家として独自の発展の道を目指すべきであるとするユーラシア主義の理念が、１９２０・３０年代の亡命ロシア人社会で唱えられた。このユーラシア主義の理念が共産主義にかわる国家理念としてソ連崩壊後のロシアの知識人の間で復活した。だが、実際のロシア外交は、「ユーラシア・アイデンティティ」といった理念ではなく、現実主義的な認識の下に展開されている。先に引用した１９９２年の外交問題会議に対外諜報庁長官として参加したプリマコフは、ユーラシア国家としてのロシアの地政学的定位が対外政策の動因であり、非西側世界も視野にとらえた地政学的広がりを持たなければ、ロシアの大国としてのプレゼンスは維持できない、と主張している。外相に就任したプリマコフは１９９６年秋の訪中の帰途、記者のインタビューに答えて、「シベリア・極東地域の開発なくしてロシアが国際社会で適切な役割を演じることはできない、米国はその太平洋岸を開発して初めて真の大国になった」[23]と述べた。

２０００年以来のプーチン政権もエリツィン政権期の認識―シベリア･極東地域開発の重要性と中国傾斜の自戒―を継承してアジア太平洋外交を展開しようとしてきた。２０１２年にＡＰＥＣ首脳会議をウラジオストックに招致し、シベリア・極東への投資を促す東方経済フォーラムを２０１５年から毎年同地で開催している。対中関係とのバランスをとるために、対日関係やインド・ＡＳＥＡＮとの関係を強化しようとしてきた。だが、２０１４年のロシアによるクリミア併合を契機として欧米との関係は決定的に悪化し、ロシアは一層の中国依存を強いられている。ロシアの安全保障問題の専門家は、自国の中国依存の症状を診断して、日本やインドとの関係強化が停滞する一方で、ロシアの中国傾斜は是正されることなく、さらに増して中国依存へと転化している[24]、と言う。

プーチンは、大統領職に復帰する２０１２年の選挙前に発表した外交論説で、「中国経済の成長は決して脅威ではなく、中国の風を我々の経済の帆に受けるチャンスである」[25]と言明した。ところが、２０１５年にロシア主導のユーラシア経済同盟と中国の「一帯一路」のプロジェクトを調整することが両国間で合意されたが、その具体化は殆ど進んでいない。輸送インフラの建設については、中国はロシアを経由せずカザフスタンを経由する交通路を開こうとしている。２０１４年と２０１８年を比較した両国間の貿易総額は、９５０億ドルから１００８億ドルへと増加しているが、中国がロシアにとって第１位の貿易相手国であるのに対して、ロシアは中国の第１０位の相手国でしかない。貿易の増加分はロシアから中国への燃料・鉱物資源と石油製品の輸出が主であり、いびつな貿易構造に変化はない。国営企業と政府に近い企業に利益が集中する傾向にも変化はない。中国の金融

機関は欧米の対露制裁に抵触することを恐れて、ロシアへの融資には慎重であり、中国の対ロ直接投資にも顕著な増加は見られない[２６]。また、シベリア･ロシア極東の土地や森林、水資源を乱開発する中国企業に対する地元住民の反発も伝えられている[２７]。

安全保障関係では、兵器輸出や共同訓練、合同哨戒飛行等、露中の軍事協力の深化が指摘されている[２８]。だが、ロシアが伝統的に「裏庭」と見なしてきた中央アジアでは、経済面での浸透に加えて安全保障面でも中国の浸透が顕著となっている。中国は１９９０年代から中央アジア諸国と対テロ共同訓練を行い、訓練施設の建設や軽装備の供与などを行ってきた。近年はタジキスタンとアフガニスタン、パキスタンを誘って「対テロ協力高級指揮官会合」を開き、中央アジアへの安全保障面での関与を強めている。タジキスタンのアフガニスタン国境近くに中国の支援で監視哨を建設する協定を２国間で結び、さらに非公開の協定で中国の軍人の駐留を認めている、との情報もある[２９]。その背景には、「一帯一路」によって建設されるインフラと中国の経済利権を防衛するという意図があろう。

中国からの投資という東風は、プーチンが期待したほどの風力ではなく、決して順風満帆ではない。その一方で、シベリア･ロシア極東には中国の乱開発という局地的な暴風が吹き始めている。ロシアが新たな発展方向として指向する極北に目を転じると、北極圏に向けられた中国の野心が露わとなり、ロシア側に警戒心が生まれている[３０]。南方でも、中央アジアの経済･安全保障両面で中国からの強い東風が吹いている。中国の東風はモスクワの頭上を越えて、さらに西側に吹き付けている。ロシアが「兄弟国」と見なすウクライナやベラルーシへの中国の浸透が顕著となっている[３１]。ロシアの東方指向は、中国の強力な西方指向に押し返されているように見える。さらに、西側からの順風に恵まれない帆船ロシアは、強烈な東風に翻弄され始めている。中国経済の退潮が続いて東風が無風とならない限り、露中の力関係はロシアの不利にますます傾くのではないか。

おわりに

西欧の歴史と比較したロシア史の特異性にもかかわらず、ロシアはキリスト教文化圏に属しヨーロッパ文明に包含されているという基本的な事実と、ロシアの政治的・経済的重心がヨーロッパにあることを踏まえるならば、ロシアはアジア国家ではなくそもそも欧州国家である。２０００年の大統領就任前にプーチンは、「ロシアは多様性を持った国家であるが､我々は西欧文化の一部である」､「極東に住んでいようと､南部に住んでいようと我々は欧州人である」[３２]とインタビューに答えている。先に引用した２０１２年の外交論説では､「ロシアは大欧州と欧州文明の不可分で有機的な一部である」､「我が国民は自らを欧州人と認識している」[３３]、とプーチンは書いている。ロシアを「ヨーロッパでもアジアでもないユーラシア」と考える古典的なユーラシア主義にならって、「ユーラシア・アイデンティティへの回帰」を唱える現代のユーラシア主義[３４]は一部のロシア知識人の主張に留まっている。

１９世紀後半から２０世紀初頭にかけて帝政ロシアは、中近東と極東へ帝国主義的な進出を試みたが、他の帝国主義諸国に拒止されてヨーロッパに回帰し、欧州（第一次）大戦の渦中で瓦解した。ソ連は帝政ロシアの版図を継承したが、ソ連時代のシベリア・極東地域には、資源の供給地という「植民地」としての役割と、西側に対する軍事的前哨という「辺境の砦」としての役割のみが期待されていた。つまるところ、歴史上の実存としてのロシアは、非西欧的な相貌を持つ特異な欧州国家であり、その国土の広がりがアジアにも及んでいるという意味での地図上のユーラシア国家であった。アイデンティティとしての「ユーラシア主義」ではなく、その地理上、対外政策が必然的に多角的となり、「ユーラシア外交」となっていると言うのに過ぎない。

現在のロシアに必要とされるのは、幻影でしかない「ユーラシア･アイデンティティ」への回帰ではない。確かに、帝政ロシアからソ連、現在のロシア連邦に到るまでロシアはスラヴ系と非スラヴ・アジア系の多民族国家である。だが、両者を融合したアイデンティティはこれまで存在したことはなく､将来に形成されるとも思えない。「ロシアは中世のヨーロッパに生きている」という１００年前のマサリクの観察は、今日のロシアについても妥当するのではないか。１９１７年の帝政の倒壊、１９９１年の共産主義との決別、この歴史上の２度のチャンスをロシアは逃している。中世ではなく現代のヨーロッパに生きる道である。この２度の機会を逸したロシアは、ロシア史の中で連綿と続いてきた「父権的な権威主義」に回帰した。

ユーラシア主義の始祖Ｎ．Ｓ．トルベツコイは､「ヨーロッパの文化は［全］人類の文化ではない」と言い、ロマンス･ゲルマン［西欧］文化の普遍性を否定した(３５)。その主張については、然りと言うべきである。プーチンも２０１３年の大統領教書演説で、西側の価値観を「善悪を同列に置く」ものと揶揄し、その他国への強制を非難しながら、ロシアは伝統的な価値観を擁護する保守主義の立場をとると宣明している｡プーチンはその中で、伝統的な家族の価値、宗教生活を含む真の人間の営み、単なる経済的生活ではない精神性を持った人生など、１９世紀のスラヴ主義を想起させる言葉を使っている(３６)。その意図は、スラヴ主義的な言辞を借用して、自らの権威主義体制を修飾することであろう｡「ソボールノスチ」と利権の分配を内実とする「プーチン体制」が等値の概念とは思えない。

中国の乱開発に反対するシベリアやロシア極東の住民は、それを許容している無能で腐敗（中国企業と癒着）した地元政府に憤っている。そして、プーチンの利権構造のインサイダーとなり対中関係の中で利益を独占し、地元の苦難を軽視するモスクワの特権階層に根深い不信感を持っている。２０１９年のプーチンは、欧米社会の混乱の原因は支配エリートと多数の一般国民との乖離であると言うが、ロシアも同様とは言わない。伝統的な諸価値が社会を安定させると言い、「リベラルの理念は寿命が尽きた」(３７)と断言する。だが、２０００年のプーチンは、自信を持って次のように明言していた。

ロシアが歩むべき道を再発見する必要はない｡「それはすでに見いだされている､それは

民主主義的発展の道である、我々は西欧文化の一員である、正にそこに我々の価値観もある」(３８)。

ここで、「欧州文明」ではなく「西欧文化」という言葉を使っていることも注目されるが、「欧州」であろうが、「西欧」であろうが、「ロシア」であろうが、「民主主義的発展の道」は「権威主義の道」へと繋がるものではない。ロシアの活路は、夢想的なユーラシア主義にも、西側に反発する「東方への転回」にも求められない。活路となる東方指向は、シベリア・極東地域の資源の切り売りではなく、利権配分の体制を改めて投資環境を整えることである(３９)。他国を利用しようとして依存関係に陥ることなく、「独立不羈の企業家精神」(４０)を持ってアジアへの発展の方向を追求し、「地図上のユーラシア国家」から「真正のユーラシア国家」へと変身することが、ロシアの真の再生の道ではなかろうか。

注

（１） *V.O.Kliuchevskii Sochineniya Tom 1 Kurs russkoi istorii Chasti 1*, Gosudarstvennoe izdatel'stvo politicheskoi literatury, Moskva, 1956, p.31.

（２）ロシア語でカザーク。語源はトルコ語にあり、「自由な戦士」を意味する。１５世紀の後半以来、農奴制の抑圧を嫌って南部の草原地帯に逃亡した農民によって主に形成された。帝政政府はコッサクの反乱を鎮圧する一方で、植民と辺境防衛のために彼らを利用した。

（３）クリミア戦争（１８５３～５６年）は、ロシアとイギリス・フランス・トルコ・サルディニア四か国との戦いで、クリミア半島が主戦場であった。近代的装備の英仏軍に敗れたロシアは、ベッサラビアの南半を失い、黒海における艦隊保有を禁じられた。クリミア戦争の敗北により近代化の後れを痛感したロシアは、農奴解放を柱とする大改革を始めた。ロシアは近東・バルカン進出を果たすべく、１８世紀から１９世紀にかけて幾度もオスマン＝トルコと戦火を交えたが、１８７７～７８年の露土戦争に勝利して、ルーマニア領ベッサラビアとトルコ領の黒海東南岸の併合、スラヴ系のブルガリア公国の建国等をトルコに認めさせた。しかし、列強の干渉により開かれたベルリン会議の結果、ロシアは勝利の果実の多くを取り上げられ、外交的な敗北を喫した。

（４） *V.O.Kliuchevskii*, p.47.

（５）ロシア人は、モンゴル人とモンゴル軍に参加していた多数のトルコ系民族をタタール人と総称した。後世のロシア人は、モンゴルの過酷な支配を牛馬の首にかける頚木になぞらえて「タタールのくびき」と呼んだ。

（６）９８９年、キエフ・ルーシのウラジーミル大公は、ビザンチン帝国（東ロ―マ帝国）の東方教会の正教を国教として受容した。ロシアの正教会は、カトリックとの合同を目指したビザンチンの総主教に反対して独立し(１４４８年)、「真正なるキリスト教」の護持を自認するようになった。こうした自意識から、ロシアこそが滅亡したローマと

ビザンチン（１４５３年、トルコ軍の侵攻により滅亡）に代わる真のキリスト教国であるとする「モスクワ＝第三ローマ」論が生まれた。

（７）T.G.サマリク『ロシアとヨーロッパⅠ』(プラハ　マサリク研究所　１９９５年)［石川達夫（訳）成文社、２００２年、１４ページ。］

（８）ドストエフスキー　『作家の日記』（６）［米川正夫（訳）岩波文庫、１９９１年、３１０－３２９ページ。］

（９）同上、３２０ページ。

（１０）同上、３２０ページ。

（１１）ロシアの農民共同体（ミール）は土地を共同所有・利用する農民の自治組織であるとともに、納税と賦役の義務を連帯して負っていたという意味でロシアの専制を支える柱でもあった。１８６１年の農奴解放令では、土地を個々の農民に対してではなく、ミール単位で有償分与することとし、ミールは解体されなかった。後に帝政政府は農民の土地私有を奨励し、独立自営農民を育成しようとしたが、第一次世界大戦の勃発によりこの土地改革は頓挫し、ミールは農村部での革命の拠点となった。

（１２）「『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピスキ』編集部への手紙」『マルクス･エンゲルス全集』第１９巻、大月書店、１９６８年、３１ページ。

（１３）*Pravda*, April 24　1986, p.4.

（１４）*Pravda*, July 29　1986, pp.2-3.

（１５）『マヤ―ク通信』１９９２年１１月２４日、第６０７号、４ページ。

（１６）*Mezhdunarodnaya zhizn'*, no.3-4, 1992, p.92.

（１７）*Ibid.*, pp.107-110.

（１８）*Mezhdnarodnaya zhizn'*,　no.3-4, 1992, pp.99-100.

（１９）*Rossiiskie vesti*, October 29 1992, p.1.

（２０）*Diplomaticheskii vestnik*, no.23-24, December 1994, p.32.

（２１）*Rossiiskie vesti Ofitsial'no* Ⅰ, December 25 1997.

１９９７年１２月に公表された「ロシア連邦国家安全保障の概念」は、アジア太平洋地域の統合プロセスからロシアが隔離していることは、ユーラシア大国であるロシアにとって受け入れがたい、という認識も示している。

（２２）１９９６年５月に公表されたロシア大統領「国家安全保障教書（１９９６～２０００年)」草案には、「最大の潜在的脅威となるのは、極東で経済的・人口的膨張を始めた中国であるが、日本との政治対話が中断し、ロ日関係の正常化が進んでいないことが憂慮される」との記述があった。同年６月に公表された教書ではこの記述は削除されていたが、ロシアはこのころから対日接近の姿勢を明らかにし始めた。*Nezavisimaya gazeta-stsenarii,*, May 23 1996, p.2.

（２３）*Izvestiya*, November 22 1996, p.3.

（２４）Dmitrii Trenin, “20 let Vladimira Putina:transformatsiia vneshnei politiki,” *Moskovskiitsentrkarnegi* (https://carnegie.ru/2019/08/14/ru-pub-79670) ２０１９年８月１６日アクセス。

（２５）Vladimir Putin, “Rossiia i meniaiushchiisia mir” ロシア首相府ホームページ。(http://archive.premier.gov.ru/events/news/18252/) ２０１９年８月２０日アクセス。

（２６）See ”Druzhba na rastoyanii ruki,” *Kommersant’* (https://www.kommersant.ru/doc/3984186?from=main_trend) ２０１９年６月４日アクセス。

（２７）See *Ibid.*; Vita Spivak, “Velikaia kitaiskaia v’rubka.Chto real’na ugrozhaet sibirskomulesu,” *Moskovskii tsentr karnegi* (https://carnegie.ru/commentary/77100) ２０１８年８月３０日アクセス。

（２８）See Vasilii Kashin, “Rossiia i Kitai:soiuz ili strategicheskaia neopredennost’?”*RSMD* (https://russiancouncil.ru/analytics-and-comments/analytics/rossiya-i-kitay-soyuz-ili-st...) ２０１９年８月１３日アクセス。

（２９）中国国防省ホームページ参照。(http://eng.mod.gov.cn/TopNews/2016-08/04/content_4707491.htm;http://eng.mod.gov.cn/news/2017-08/28/content_4790108.htm) ２０１８年９月１日アクセス。
See Stephen Blank, “Sino-Tajik Exercises: The Latest Chinese Encroachment Into Russia’s ‘ Sphere of Influence’ ,” *Eurasian Daily Monitor,* (https://jamestown.org/program/sino-tajik-exercises-the-latest-chinese-encroachment-into-russia’ s-sphere-of-influence) ２０１９年７月２６日アクセス。

（３０）See Paul Goble,” Moscow worried about Chinese Dominance of Northern Sea Route,” *Eurasian Daily Monitor*, (http://jamestown.org/program/moscow-worried-about-chinese-dominance-of-norther...) ２０１９年９月６日アクセス。

（３１）例えば、中国はウクライナの農産物や核エネルギー産業の他に軍需産業に着目し、その航空機エンジン・メーカーの経営権を掌握して先端軍事技術を獲得しようとしている。See Alla Hurska,”China’s Growing Interest in Ukraine: A Window of Opportunity or a Point of Concern?,” *Eurasian Daily Monitor*, (https://jamestown.org/program/chinas-growing-interest-in-ukraine-a-window-of-oppo...) ２０１９年９月１３日アクセス。

（３２）*OT PERVOGO LITSA pazgovory s Vladimirom Putinym* , VAGRIS, Moskva,2000, pp.155-156.

（３３）”Rossiia i meniaiushchiisia mir”

（３４）See ”Vpered k Velikomu okeanu-6: liudi, istoriia, ideologiia, obrazovanie Puti k sebe,” *Valdai*, (http://ru.valdaiclub.com/a/reports/)プーチン政権がロシアの正統性について使う言辞は、ユーラシア･アイデンティティではなく、人口の８割以上を占めるスラヴ・正教系のアイデンティティである。プーチン政権は正教を受容したヴラジーミル大公の記念碑を建設し、「ルーシの洗礼［キエフ・ルーシの正教受容］は、ロシアとウクライナ、ベラルーシの国民にとって共通の精神的な源であり、我々の生活を規定する価値観の基礎となっている」、とプーチンは演説している。ロシア大統領府ホームページ。(http://kremlin.ru/events/president/news/53211)２０１９年４月５日アクセス。「ユーラシア」という言辞は、西側に対抗しようとするロシアの大国主義外交を歴史的･地理的に正当化する文脈で使われている。外相ラヴロフは２０１６年の自らの論説の中で次のように書いている。「この[モンゴル襲来の]時代は、ロシアが広大なユーラシアでロシア国家の自律した役割を確立する上で極めて重要であった」。「信仰に寛大であったキプチャク汗国に一時的に従いながら、アレクサンドル・ネフスキー大公は、ロシアの土地とアイデンティティを奪おうとした西欧に抗してロシア人の信仰と自決権を護持する政策をとった、この賢明で長期的視野を持った政策は、我々の遺伝子に確かに残されている」。S.V.Lavrov, “Istoricheskaia perspektiva vneshnei politiki Rossii,” (http://www.mid.ru/en/foreign_policy/news/-/asset_publisher/cKNonkJE02Bw/content...) ロシア外務省ホームページ。２０１９年３月２２日アクセス。注（２１）も参照。

（３５）N.S.Trubetskoi, “Evropa i chelovechestvo,” Institut otkrytoe obshchestvo, *V poiskakh svoego puti:Rossiia mezhdu Evropoi i Aziei*, Logos, Moskva, 1997, p.536.

（３６）ロシア大統領府ホームページ。(http://news.kremlin.ru/news/19825/print)２０１３年１２月１３日アクセス。注（３３）も参照。

（３７）プーチンは、多文化主義を唱えた西側のリベラリズムは多数派の利害と衝突し破綻したと言い、「ロシアは正教の国である」と言う。ここでも、プーチンが考えるロシアのアイデンティティがスラヴ＝正教であることがわかる。
“Financial Times”のインタビュー。ロシア大統領府ホームページ。
(http://kremlin.ru/events/president/news/60836)２０１９年９月５日アクセス。

（３８）プーチンは続けて、「我々は地理的･精神的に存在する場所[ヨーロッパ]に留まることを志向するが、もしそこから押し出されるなら、同盟者を見つけ出さなければならない」と述べている。これは、ロシアの利害を考慮しない西側に反発して多角外交を追求し、中国との戦略的パートナーシップを宣言（１９９６年）したエリツイン政権の対外政策を継続するという意味であろう。*OT PERVOGO LITSA*, pp.155-156.

（３９）２０１３年以来ロシア極東には９１億ドルが投資されたが、外国からの投資はその中の２０億ドル以下である。投資家が消極的である理由は、頻繁なルール変更、重い税負担、過剰な規制、汚職、制裁、借入金の高金利、そして治安機関の介入である。ち

なみに、国内からの投資の多くは、補助金を目当てに企業の登録地を経済特区に変更するような実態のないものである。See Alexander Gabuev, “Why Foreign Investors Steer Clear of Russia’s Far East,” *Carnegie Moscow Center*, (http://carnegie.ru/2019/09/09/why-foreign--investors-steer-clear-of-russia-s-far-east-p...)２０１９年９月１３日アクセス。

（４０）ドストエフスキーは次のように予言した。

「アジアに方向転換すれば、独立不羈の精神が高揚し、工業も起こり、生産も始まるだろうし、アジアの奥深い田舎に眠る膨大な消費者も見つかるだろう。企業家精神が起これば、ロシアは科学においても追随者ではなく、りっぱな主人となるに違いない」。『作家の日記』（６）３２２―３２３ページ。

参考文献

①勝田吉太郎『近代ロシヤ政治思想史』（『勝田吉太郎著作集』第１巻・２巻、ミネルヴァ書房、１９９４年）

②廣岡正久『ロシアを読み解く』講談社現代新書、１９９５年

③浜由樹子『ユーラシア主義とは何か』成文社、２０１０年

④Marlène Laruelle, translated by Misha Gabowitsch, *Russian Eurasianism An Ideology of Empire*, Woodrow Wilson Center Press, Washington,D.C., 2008.

⑤Institut otkrytoe obshchestvo, *V poiskakh svoego puti:Rossiia mezhdu Evropoi i Aziei*, Logos, Moskva, 1997.

⑥中野潤三「非同盟運動に対するソ連の態度」『ソ連東欧学会年報』１９８７年、１０１－１０７ページ。

⑦中野潤三「第三世界の民族民主主義―ソ連の想定する第三世界の発展過程―」京大政治思想史研究会編『現代民主主義と歴史意識』ミネルヴァ書房、１９９１年、３９３－４１６ページ。

⑧中野潤三「ロシア外交の基本路線とロシアのアジア外交」『外交時報』第１２９４号、１９９３年１月、３３－４４ページ。

⑨中野潤三「ロシア外交におけるアジアの比重」『ロシア研究』第１９号、１９９４年１０月、６２－７７ページ。

⑩中野潤三「ロシア極東を巡る国際関係」『ロシア研究』第２４号、１９９７年４月、７８－９３ページ。

⑪中野潤三「ロシア国家のオリエンテーションとアジア太平洋」『外交時報』第１３４８号、１９９８年５月、４９－５９ページ。

⑫中野潤三「ロシアとアジア太平洋の安全保障」『新防衛論集』第２６巻第４号、１９９９年３月、５４－６８ページ。

⑬中野潤三「ロシアの国益と北朝鮮の核問題･体制変革」『ロシア外交の現在Ⅰ』「スラブ･ユーラシア学の構築」研究報告集第２号、北海道大学スラブ研究センター、２００４年３月、５４－６１ページ。

⑭中野潤三「ロシアの再興と朝鮮半島」横手慎二編『東アジアのロシア』慶應義塾大学出版会、２００４年、８９－１１０ページ。

⑮中野潤三「ロシア極東を巡る国際関係と日本の安全保障」『鈴鹿国際大学紀要』第１３号、２００７年３月、４５－５７ページ。

⑯中野潤三「ロシアの安全保障と地域機構―独立国家共同体と集団安全保障機構、上海協力機構―」『鈴鹿国際大学紀要』第１５号、２００９年３月、1－１６ページ。

⑰中野潤三「ロシアのアジア政策と上海協力機構」『ロシア･ユーラシア経済』第９２９号、２０１０年１月、２－１４ページ。

⑱中野潤三「タンデム政権下のロシアの対外政策―西側との協調の模索―」『鈴鹿大学・鈴鹿短期大学紀要人文科学･社会科学編』第１号、２０１８年３月、８３－１０１ページ。

⑲Junzo Nakano, “Japan’s Security and the Russian Far East,” *Slavic Eurasian Studies*, no.6-1, Slavic Research Center, Hokkaido University, March 2005, pp.39-54.

⑳Junzo Nakano, “ Russian Foreign Policy in North East Asia:From the Perspective of Japan’s Security,” *Security Challenges in the Post-Soviet Space*, Polish Institute of International Affairs, Warsaw, 2007, pp.101-117.

国際人間科学部国際学科　jnpn26@m.suzuka-iu.ac.jp

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第 3 号 2020

Russia and Asia:
The Real State of Eurasian Russia

Junzo NAKANO

Abstract

Geographically, Russia is an Euro-Asian country. However, looking at her history, it becomes clear that Russia is a unique European Country with an Asian physiognomy. Russia is an Eurasian country only on the map. She is not a real Eurasian country owing to her underdeveloped Siberia and Far Eastern Region. Westerner's economic sanctions on Russia forced her to lean more on China. Now, Russia's leaning on China has turned into her dependence on China. Eurasianism that believes in Eurasian identity is a utopian idea, not the right way to revive Russia. If Moscow hopes to promote the development of Siberia and Far Eastern Region, the Kremlin must transform its authoritarian regime into a democratic and more efficient one. Then investment would increase from home and abroad.

Keywords : Russia, Asia, Eurasia, identity, foreign policy